

箏曲「六玉川」・地歌「玉川」の歌詞から

——六つの玉川のこと——

宮 川 武 治

竹号 恭 園

一、まえがき

私の竹歴が七十年にもなると、思い出に残る箏曲や地歌（註1）も数多くあるが、地歌「玉川」もその一つである。この曲は、江戸中期の安永（一七七二—一七八一）又は寛政（一七八九—一八〇二）の頃に、上方京都で活躍し三絃の名手と伝えられる国山勾当（註2）の作曲で、作詞は穂積頼母である。此の曲には手事（テゴト）と称する楽器だけで演奏する間奏が入るが、この手事が現代的な感覚の斬新な曲調で、また後年に菊岡検校（ケンキョウ）と石川勾当（イシカワコウドウ）も作曲されていて玄人好みの曲である。この玉川の歌詞であるが、末尾を「六の玉川」と結んでいる様に、六つの玉川が詠い込まれている。川の名称といえども固有名であるべきと思うが、これは如何したものか。特に畿内の至近の地域に四つ

の玉川が存在しているとは。ところで、箏曲の組歌にも六つの玉川を詠んだ三橋検校（ミツハシケンキョウ）（一七三六—一七九六）の「六玉川」がある。作曲者の活躍年代から考えると、この「六玉川」が地歌「玉川」の先鞭をつけたと推考される。

本稿は、先ず箏曲「六玉川」を分析して歌詞の成り立ちを明らかにし、地歌「玉川」の歌詞についても検証した後、六つの玉川について、その由緒・来歴と今の姿を尋ねたものである。

（註1）三絃（三味線）曲のことで、その土地の歌を弾き歌うの

でこの名が起こった。上方（京都）は地歌、江戸は地唄と書く。

（註2）盲人で組織した当道座の官位で、検校・別当・勾当・座頭がある。

（註3）原曲と合奏出来る様に作曲した曲のことで、原曲は本手（ボシテ）という。

二、始めに箏曲「六玉川」について

江戸時代の初期、八橋檢校（一六三九登喜）が江戸に出て今に伝わる箏を完成し近代箏曲が始まった。この頃の作品は、私達がよく耳にする「六段の調」の様に歌がなく六小節からなる「段物」という器楽曲と、複数の歌を連続して歌いながら演奏する「六玉川」の様な「組歌物」で、箏曲の作品では古典の部類に入る。

私がこの箏曲「六玉川」の成り立ちを調べていた時、懇意にしている方から思いも寄らぬ『箏曲大意抄（再刊版）』を拝借することが出来、これに編集されていた「六玉川」の楽譜を詳細に検証することが出来て、本稿を進める上で大きな力になった。

この『箏曲大意抄（再刊版）』は、明治三十六年、名古屋市中区新栄町、合資会社永東書店が発刊したもので、B4版の和紙に原本通りの版刷をし、これを背折りしてB5版に帖綴し、表、裏、中、奥、新曲・彈変、奥書、附録の全七巻から成り、深さ十五糎程のボール箱に入っている。

資1は巻末に添えられた編集者山田松黒の奥書で、これを判読すると次の様に書かれている。

此書、門葉の外聊、他見あるまじければ愚なるをまはばからず其人々撫る處の次第に依じて巻々を傳ふ一一書寫せしめむ事しげければあづさにちりばめて是をかくす猶

に堪能の先達にたよりてあしきを削り好を補て萬年箏曲の地譜うしなはさしめむのためにこ、につたなきふでを落し侍るもの也

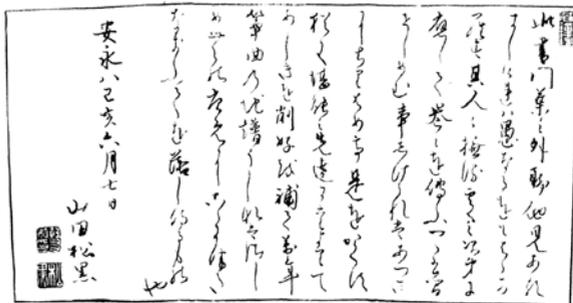
安永八巳亥六月七日

（二七七九）山田 松黒

これを要約すると、口伝や書き寫しによる教習法を改めて、正しい楽譜を編纂したというものである。^{註4}

この『箏曲大意抄』には段物七曲、組歌物三十三曲等が収められ、その作曲者も明確になっている。組歌曲の歌詞の多くは、源氏物語・伊勢物語・勅撰和歌集を原典にしたことが楽譜の上枠外に添え書きされているが、作詞者名は全く記録されていない。

次は『箏曲大意抄巻五』に編集されている箏曲「六玉川」の歌詞と原典とする和歌で、この和歌を『勅撰和歌集』及び『類字名所和歌集』^{註5}と照合して歌番号を示した。



資 1

箏曲 六玉川 作詞者不詳 三橋檢校作曲

(一) 井出の玉川

歌詞 いはでおもふこゝろのいろを八重にしも うつし
そむてふつれなさに 春のつきげのこまとめて いざ
みづかはんやまぶき

原典 山城の名所 藤原俊成

駒とめてなを水かはんやまぶきの

花の露そふ井手の玉河

新古今集(二五九春歌)、類字名所(四四二・井出の玉川、一番歌)

(二) 野路の玉川

歌詞 をのがあきとやさほしかの しがらむはなのすり
ころも うつろふなみもむらさきに みだれそめにし
しらつゆ

原典 近江の名所 源 俊頼

あすも来む野路の玉川萩越えて

いろなる波に月やどりけり

千載集(二八一秋歌)、類字名所(三一七二・野路の玉川、
一番歌)

(三) 攝津の玉川

歌詞 かはどにつたふまつかぜの をとだにあきはさび
しきに ころもうつぎのかきもあれて きぬたもい
とゞいそぐなる

原典 攝津の名所 相模

見たせば波のしがらみかけてけり

卯の花咲ける玉川の里

後拾遺集(七五夏歌)、類字名所(三〇八八・攝津の玉川、一番歌)

(四) 武蔵の玉川

歌詞 きのふのそでもほしやらで まだきぬれそふあさ
つゆに なみもひかりをうちよせて さらすやしづが
てづくり

原典 武蔵の名所 よみ人しらす

玉河にさらす手作りさら／＼に

昔の人の恋しきやなぞ

拾遺集(八六〇)、類字名所(三一六一・武蔵の玉川、一首)

(五) 野田の玉川

歌詞 しおかせこしてよもすがら つきもみがけるかわ
なみに くだけてものをおもひねの ゆめをさそひて
なくちどり

原典 陸奥の名所 能因

ゆふされば潮風越してみちのくの

野田の玉河ちどりなくなり

新古今集(六四三冬歌)、類字名所(三三〇一・野田の玉川、
一番歌)

(六) 高野の玉川

歌詞 とかへるたかのやまふかみ しかはあらしのこが
らしに ながるるみづのなのみして こほりもむすぶ

ばかりなり

原典 紀伊の名所 弘法大師

わすれてもくみやしつらん旅人の

たかの、おくの玉川の水

風雅集（二七八八）、類字名所（三三七七・高野の玉川、一首）の様に、「六玉川」の六つの歌詞は原典和歌に縛られることなく、五十字前後にまとめた文学的な作詞である。

〔註4〕 山田松黒（晴眼者）は、生田流箏曲江戸系の長谷富檢校の門下で、その弟子に山田流箏曲の祖、山田檢校（一七九七登官）が出る。

〔註5〕 『類字名所和歌集』は、室町時代から幕府の連歌師を代々勤めた名門、里村の昌琢が元和三年（一六一七）に編纂した。『古今集』に始まり『新続古今集』までの五百年間に亘って撰集された二十一代集と称する二十一の勅撰和歌集から名所を詠んだ和歌を、先ず名所歌枕を国別（配列順の根拠は不詳、五十九の国別）に、次は名所歌枕をいうは順に、そしてその名所和歌を勅撰和歌集の編集年順に配列して編纂した、連歌師ならではの利便性を徹底した名所和歌集。

私は箏曲「六玉川」の作詞者が、原典にする和歌をどの様に撰定したのか、江戸初期に出現した『類字名所和歌集』を軸に検討を重ねた結果、この作詞者は、『類字名所和歌集』に編集されている六つの名所玉川を採りあげて、先ず京の周辺の山域・近江・攝津の順で玉川を詠い、武蔵・陸奥とつづけ、最後に異色の高野の玉川とした。そして原典とする和歌について、夫々の国の玉川歌が複数ある時はその一

番歌、即ち最も早く撰集された勅撰和歌集の和歌を撰び作詞したものと推考している。

三、地歌「玉川」の歌詞のこと

次は生田流箏曲楽譜から引用した地歌「玉川」の歌詞で、該当する名所玉川の名称を、また「手事」が入る個所も（一）で示した。

山城井手の玉川

山城のいでや見ましと駒停めてなほ水かはん山吹の花の露そふ春もくれ夏来にけらし見渡せば波の柵かけてけり

卵の花さける津の国の里に月日を送るまにいつしか秋にあふみなる野路には人の明日もこん今を盛りの萩越えて

色なる波に宿りにし月の御空の冬深み雪気催はず夕されば汐風越して陸奥の野田に千鳥の声淋しゆかし名だたる

武蔵野に晒す晒す調布さらさら（陸奥野田の玉川）
昔の人の恋しさも今

將そひて紀の国の其流れをば忘れても汲やしつらん旅人の高野の奥の水までも名に流れたる六つの玉川

この歌詞をよく見ると、前記「箏曲大意抄」の箏曲組歌「六玉川」の楽譜の上枠外に添書されている六つの名所玉川の

原典和歌に、実によく整合している。原典和歌の文字を並べ替えたとも思える程である。將に箏曲「六玉川」と地歌「玉川」は、『類字名所和歌集』という同じ屋根の下に生れた曲

ということが出来る。特に地歌「玉川」の歌詞は、「六玉川」の原典和歌を春夏秋冬の季節順に四つの玉川を詠い、この次に武蔵の玉川、最後に霊場高野の玉川とし、夫々の玉川を四十字前後のシンプルな歌詞にまとめることによって、六つの玉川の個性を強調し、箏曲「六玉川」の二番煎じの誇りを封じているのは、作詞者穂積頼母の功績であろう。

四、六つの玉川を尋ねて（箏曲「六玉川」の歌詞に詠まれた順による）

(一) 山城、井手の玉川
井手の玉川は、資2
(関西道路地図を引用、加筆)に見る様に、京都府南部の綴喜郡井手町の南域に横たわる山吹山の裾を縫って、木津川の右岸に注ぐ全長六キロの細い流れの川である。山吹山の谷筋では浸蝕を防ぐために多くの堰がある。資3は、谷筋の出口、㊸地点の



資2

玉川で、こゝを過ぎると川幅十五メートル程の堤防が整備された川になるが、㊸地点の資4（井手町資料から引用）に見る様に木津川に入るまで一メートルの堰が続き、往時の流れではないが、自然豊かな環境に恵まれていて、平成二十年に名水百選に入っている。この井手の地は、南に十キロを距て、奈良の平城京で、聖武天皇（四十五代）天平十年（七三八）に、右大臣に栄進した橘諸兄の別邸が山吹山西端山麓にあったとされ、遺跡碑がある。木津川沿いには、二十キロ北の平安京と結ぶ奈良古道が通り、井手は王朝人によく知られた名所であったのであろう。『類字名所和歌集』の「井手」の部には、井手の山吹・蛙・玉川を詠んだ和歌が実に五十五首を数え、二十一代集のすべ



資4



資3

ての勅撰和歌集に登場し、これを詠んだ王朝人は四十六人を数え、藤原俊成が五首を詠み際立っている。

私は平成二十八年五月初旬にこの地を訪れ、ふるさとガイド宮本敏雪様の案内で井出町の各所を巡ったが、この年は山吹の花が見られないとのこと、又当日は好天で蛙の鳴き声を耳にすることが出来なかったが、流れる水は紛れもなく昔と変らぬ清流玉川であった。

(二) 近江、野路の玉川

野路の玉川は、王朝時代に琵琶湖の東岸、今の草津市野路町にあった清流である。しかし現在は次の様に諸説があり、特定出来ないのが実状である。(資5―国土地理院地図を引用、加筆)

『日本歴史地名大系』は、牟礼山附近から西流して琵琶湖に注ぐ十禅寺川を当て、いる。『広辞苑』は、近江国栗太郡老上村(草津市)野路を流れる川で狼川を当て、いる。『大辞泉』は、草津市野路町にあつ



資5

た小川とだけ書いている。『古代地名大辞典』は、平安時代に野路地内の弁天池近くに、清水が湧き出るかなり広い池があり、旅人の憩いの場所で、これを玉川と称したという。そして昭和五十一年に、地元野路町ではこれを復元して古蹟としたと記している。『当地の草津市』は、野路の玉川について特定していない。

なぜこの様なことになっているのか、私は次の様に推論している。

第一に、草津市の地勢は背後に山が迫り、何れの川も奥が浅く、また市域には池が点在する湧水豊かな地であり、川も池も往時の姿が今も保たれているとは考え難い。

第二に、『類字名所和歌集』の近江玉川の歌枕には、撰歌された和歌が僅かに三首に過ぎないこと。しかも源俊頼が二首を詠み、もう一首は大宰権帥(大宰府長官) 仲光が詠んでいる。この野路の地は平安京に近く、しかも瀬田の唐橋の東には近江の国府があり、東海道、東山道に繋がる古道も通り、人の往来もあつた野路の玉川であるにもか、わらず、名所歌枕としては実に寂しい限りである。この俊頼は和歌史上の巨人と称えられる人物で、勅撰和歌集『金葉集』の編者でもあるが、大津に逗留して琵琶湖岸の秋を詠んだと伝えられているので、私は、俊頼がこの時に足を延して野路を訪ね、凡人には平凡な流れや萩を、素晴らしい感性で「野路の萩の玉川」に詠み上げたものではないかと

推考している。また大宰相
帥仲光については、この俊
頼四十歳の時、父の大納言
源経信が大宰府に赴任した
際に同行しているので、こ
の時に俊頼から和歌の指導
を受け、歌枕「野路の玉川」
を詠んだものではなからう
か。

資6は、私が野路町の古
蹟を訪ねた時の写真であ
る。国道一号の南田山の信
号から細い脇道に入ったところにある。池端に立つ人の背
丈程もある大きな達磨石に「野路菘の玉川」と刻まれてい
る。道路沿いには「玉川」の碑が立ち、十メートル程の広
さの瓢箪形の浅い池が造られて井水が湧き出ていた。野路
の玉川を模したものであろう。この古蹟の裏は湿地の様で、
折からの小雨に勢いを得たのか、蛙の聲がかまびすしく聞
えていた。

(三) 攝津の玉川

攝津の玉川は、現在は大阪府東北部の淀川沿いに位置し
ている高槻市の南部域を南へ流れ、後述する番田井路を合



資6

流して西隣の茨木市との境界に沿って南下し、安威川アヱイに合
流するまでの川を指しているが（資7—国土地理院地図を引
用、加筆）、王朝時代に名所歌枕になった攝津の玉川（津の
国の玉川ともいう）は、この玉川とは姿の違った川であった。
高槻市史によると、往時の玉川は、檜尾川（芥川の東ニキ
口の地を流れる）・芥川の水を合流して淀川と並行して流れ
る流量の多い暴れ川であつたらしい。この故に、元禄時代
に高槻藩が淀川右岸の流水系統を根本的に変える大工事を
行なっている。これによると、檜尾川・芥川を淀川に直結
し、新たに番田井路を設けて玉川に結び、同時に玉川と安
威川を拡幅して堤防を整備した。



資7

資8 (高槻市資料引用)

は高槻市玉川二丁目地内の玉川右岸㉔地点から南方を眺めた静かな流れの今の玉川である。○・五キロ上流の番田井路との合流点に玉川橋があるが、その橋の袂には、枕石に玉川の由緒を詳述した表札が立っている。この玉川橋から南の左岸堤防は桜並木の遊歩道になっていて、木の間には卯木(ウツギ)が植えられていて、私が訪れた五月初旬は満開であった。

資9は『攝津名所図會』に画かれた玉川で、資7の三島江㉕地点から西方向を展望して画いた様に見えるが、田圃の中を屈折して流れている玉川、点在する集落、そして安威川と思われる川、街道を行く旅人の姿が画かれていて、元禄の大工



資8



資9

樹間には卯木(ウツギ)が植え

事以前の「玉川の里」が読みとれる貴重なものである。

『類字名所和歌集』には、「攝津の玉川」を歌枕として十五首、「三島江の玉江」が十一首撰集されている。玉川の北東十キロの淀川沿いの地は、山城の国の国府が置かれた山崎で、その東は桂川・瀬田川・木津川が合流して淀川になる所で、こゝに淀川水運の要衝、淀津があった。玉川や三島江の周辺は資7の地図からも判る様に、棋盤の目の様に整然とした条里遺構が今も街の区画に見られ、古代以来、豊かに拓かれた農村地帯であって、点在する集落の「卯の花の垣根」が「玉川の里」という歌枕と結びついて、多くの王朝人に詠まれたのであろう。

(四) 武蔵の多摩川(玉川)

多摩川は、秩父山地に源を発して山梨県の北辺を東に流れ、東京都域に入って奥多摩湖を経由し、神奈川県との境界を東西に横たわる多摩丘陵の北側を東流して、下流は神奈川県境に沿って東京湾に注ぐ流路一三〇キロ余の大きな川である。『日本歴史地名大系』によると、源流を一之瀬川、次いで奥多摩湖までを丹波川、湖を出ると多摩川と呼び、河口近くを六郷川という。多摩川を玉川と記すのは、歌枕で六玉川の一つに数えられることによるものである。

奥多摩湖から流れ出た多摩川流域一帯は武蔵の国で、国府が今の府中市の辺りに置かれていた。豊かな農耕地でも

あり、ここに大和朝時代から屯倉が設定され、当時、半島から渡来した多くの人々が入植して、この地の産業に貢献している。歌詞に詠まれている麻布や綿布を多摩川で布晒しする手作り（手織りの布）も、この人達が伝えたものという。

資10は『江戸名所図會』に画かれた多摩川（玉川）の里の布晒し風景である。

『類字名所和歌集』には、「武蔵野」を歌枕にした和歌は数多く撰集されているが、多摩川の和歌は、箏曲「六玉川」の原典和歌の一首だけである。『万葉集』第十四卷武蔵国歌に次の作品がある。

多摩河伯尔左良須弓豆久利佐良良尔

奈仁曾許能児乃已許太可奈之伎（三三七三）

平安初期、和歌が興って間もなく、王朝歌人に万葉歌が見直された時があるが、前述した『拾遺集（八六〇）』よみ入しらずの和歌は、この様な流れの中で詠まれたこの歌の



資10

再生作品ではないかと推考している。

(五) 陸奥、野田の玉川

野田の玉川は、宮城県塩竈市南西域の大口町から流れ出て南下し、多賀城市（資11）日本歴史地名大系から引用、加筆）の中央域を流れて砂押川に注ぐ三キロにも満たぬ小流である。（資12―多賀城市資料引用）この砂押川は多賀城市域東南の一隅から仙台港に注いでいる。玉川流域は市街地が多く、コンクリートで明渠化された玉川（資13―多賀城市資料引用）であるが、往時は海が近いので潮風が吹き渡る自然豊かな玉川であったと思われる。



資11



資12

この玉川を世に出したのは能因法師（九八八）で、二度奥州行脚しているから、この折りに玉川を詠んだものであろう。この玉川の西方は奥羽山脈から派出した松島丘陵の先端部で、ここに古代史に登場する多賀城（神亀二年（七二四）、大野東人が築く）、そして陸奥国府政庁が所在していたことが、江戸初期に多賀城碑文（壺碑―つほのいしぶみ）が解読されて明らかになった。

この様に現在の多賀城市域は、奈良時代から陸奥（古名道奥）の枢要な地であったことから、都から遠く離れた北の果の地でありながら多くの人が往来してよく知られた地であったのであろう。多賀城の周辺には資11に見る様に名所歌枕が点在している。特に目を惹くのは「末の松山」（資14）で、『類字名所和歌集』には五十九首、五十三人の名があり、二十一代集に万遍なく撰歌されている。ではこの小高い丘に立つ二本の老松が、何故に王朝歌人の的になったのか。伝えられる説は、貞観大地震では多賀城下まで押し寄せた大津波であったが、「末の松山」を越えることは



資13

なかったという。都に

伝えられて大きな反響を生んだのであろう。

まさしくこれは、平成

二十三年の東日本大震

災の大津波に耐えて、

ただ一本だけ残った陸

前高田市の「奇跡の一本松」の貞観版である。

次は『三代実録』（註）巻十六、清和天皇（五十六代）貞観

十一年（八六九）五月廿六日の記述に残された貞観大地震

の記録である。

五月廿六日癸未。陸奥國地大震動。流光如晝隱映。頃之。

人民叫呼。伏不能起。或屋仆壓死。或地裂埋殮。馬牛駭奔。

或相昇踏。城墻倉庫。門櫓墻壁。頽落顛覆。不知其數。海口

咆哮。聲似雷霆。驚濤涌潮。汜洄漲長。忽至城下。去海

數十里。浩浩不弁。其涯涘。原野道路。惣爲滄溟。乘船

不遑。登山難及。溺死者千許。資産苗稼。殆無子遺焉。

（大意）五月二十六日、陸奥国で大地震。晝の様に光が

闇に流れ走った。この頃、人々は叫び声を上げ、伏した

まま起き上れず、家が倒れて圧死したり、大地が裂けて

埋れ死んだ。馬牛は驚いて駆け出したり、飛び跳ねた。

多賀城、国府政廳の建物や塀の壁が無数に崩れ落ちた。

周辺の海は雷鳴の様に高鳴り、大きな波が起り、涌き立



資14

ち（津波）、陸にさかのぼって張り出し、すぐに多賀城下（玉川流域にも）に達した。海から数十百里（註7）は一面の水で、その涯（きわ）が判らない。原野・道路はすべて海になり、船に乗る間もなく、山に逃げることも出来ず、溺死者千人許り、資財は殆んど残ったものがないだろう。

というものである。江戸時代には、松尾芭蕉が奥の細道紀行で、この名所歌枕、壺碑・野田の玉川・沖の石・末の松山を親しく尋ねている。

〔註6〕 清和・陽成・光孝三天皇、三十年間の史書。
〔註7〕 当時の条里制による一里は六町（一町は約一〇九メートル）で六五四メートル、百里は六五・四キロメートル、十百里は六五四キロメートルになる。数十百里は理解出来ない大きな距離。これは大津波が押し寄せた海岸の範囲を指したものである。

(六) 紀伊、高野の玉川

高野の玉川は、和歌山県東北部の伊都郡高野町の中央域、東に摩尼山・楊柳山、西に弁天岳という千メートル級の山々に囲まれた、東西五キロ、南北三キロに広がる標高八百メートルの盆地、通称高野山の東部に流れている流長二キロ程の弘法大師由縁の溪流である。（資15—高野町水路図を引用、加筆）

この高野山には、真言宗の開祖空海（諡号弘法大師）が金剛峯寺を創建（八一六）されて多くの堂宇が谷筋一带に点

在し、そして入定された御廟の奥の院がある。また高野町役場を始め行政の諸施設や、小学校から大学まで、そして二つの団地もあり、高野町の中心地である。

この様な高野山の近代化は、昭和九年（一九三四）の弘法大師千百年御遠忌を契機に始まり、特記すべき事業として

。高野山の多くの水路が、長年に亘り下水道兼用であったことによる水質汚染を一举に解決するため、上下水道が新設された。

。西域の弁天岳から流れ出て、高野山の中央域を東に流れる有田川源流の御殿川、そして玉川を始めとする多くの溪流を暗

御殿川・玉川について、細線は明渠、大線は暗渠を示す。
……は奥之院参道を示す。



資15



資16

渠化してその上を道路にし、また明渠化して急流による川床の浸蝕を防ぐ等の水路工事が行われた。

資16（高野町資料）は奥の院の御廟橋付近の玉川であるが、川筋は明渠、堰もあって緩やかな流れで、このまま南に下り、中の橋で御殿川に合流している。

ところで、弘法大師がこの玉川を詠んだ『風雅集』の和歌一七八七番には次の詞書（前文）が添えられ、この玉川の水が毒虫による汚染された毒水であると警告していることについて、江戸期以降、物議を醸している。

（詞書）高野の奥の院へまいるみちに玉川といふ川のみなかみに毒虫のおほかりければ、このながれをのむまじきよしをしめしおきてのち、よみ侍りける

また、同時期（貞和五年、一三四九）に撰集された私撰集の『安撰和歌集』第十九釋教歌三七六番にある弘法大師の和歌三首の内の一首に、同義の添書を付した次の類似和歌がある。

しらすしてのみもやせまし旅人の高野のおくのあしびきの水

（添書）此歌は、弘法大師、高野山にひとつの谷を點じて（指して）、もろもろの毒虫のたぐひを呪しこめ給へり、この谷の水を服する人、かならず害あるゆゑに、大師よませ給へる御歌となん。

この高野の玉川の和歌、そして毒水説について、江戸期

に、理路整然と論説を展開しているのは上田秋成（一七三四—一八〇九）で、自著の怪異小説集『雨月物語』の佛法僧の巻で、佛法僧（コノハズク）の鳴き頻る夜半、高野山奥の院の御廟に異界から現われた貴人とその一行、これは高野山に幽せられ太閤秀吉の命で自害させられた関白豊臣秀次（二五六八—一五九五）と、親交があった従者の法師、連歌師の里村紹巴（一五二七—一六〇三）で、二人の間答形式の対話の中で論じている。その要点は、

弘法大師が詠んだ和歌の本意は「参詣人が諸国の玉川と同様に、名高い高野の玉川であることを忘れて、清流に心うたれ、思わず手にすくつてこの水を飲むであらう」という意であるのを、後に毒水説が起り、毒水であることを忘れてしまつてと大師の歌意を取り違え、この様な詞書が後になって出来たものである。

神通力を持たれた大師が、この様な毒水の玉川を詠まれることはありえないし、毒水の玉川を見過ごされることも考えられない。

。この和歌は、大師が在世した平安初期の歌風ではない。というものである。

文化史の上でも、大師在世の頃は和歌の假名文字は出現していない。大師には唐詩の影響を受けた七言詩や漢詩が多く残されていて、平安初期の『経国集』に撰集されている。また折々に著した願文・碑文・歎徳文・書簡を収集した『性

『靈集』を見ても、格調の高い漢文で、假名の遺稿はない。大師は三筆の一人でもあり、前記の大師作の和歌は明らかに疑わしい。この毒水説については、貝原益軒は玉川上流に砒石ヒヤクシ（猛毒の砒素を含有）があるのではと『大和本草（二七一五刊）』で述べているが、私は寺院関係者が上・下水混用の流水を飲まぬ様に、大師の名を借りて作文・作歌したものではないかと推考する。

高野の玉川について残る一つの論点は、高野町史の水路図（資15参照）には奥の院御廟橋の流れを玉川としているが、前記した大師和歌の詞書では奥の院へまいる道にと書かれている。また『紀伊統風土記』高野山之部奥之院の「玉川」の項では、「一説に、一の橋（資15参照）から奥の院参道に入り一の坂より半町余り行った地点（現在、玉川の歌碑が立つ）を、千手院溪谷の體不動の辺りから東に流れて来て横切り、南に転流して大河（御殿川）に入る川」と記述されているが、現在これに該当する流れは見当らず、この記述の川は幻と目される。この他にも異説があり、話題が尽きぬ高野の玉川である。

五、むすび

箏曲「六玉川」・地歌「玉川」の歌詞に登場した六つの玉川について検証した。特に関西にある四つの玉川は、平

成二十八年五月初旬に二泊三日の旅をして、親しく探訪することが出来た。個々の玉川には、夫々の由緒があり面白い。武蔵の多摩川（玉川）は古代史にも登場する地を流れる大河であり、高野の玉川は高野山という霊場の清流ということで、両者とも名所歌枕であつても作品が限られ、玉川としては特異な存在であつた。それに引き換えて、井手・攝津・野路・野田の玉川は、文字通り名所歌枕の中で生れ、美化された玉川であつた。しかし一千年もの時を経た今に見る玉川からは、往時を偲ぶ縁に乏しいのが現実の姿である。

追記

稿を終えて思い起されることは、先ず多賀城市・草津市・高槻市・井手町・高野町の教育委員会の資料の閲覧、御提供を受けての執筆であつて厚く御礼を申し上げます。名古屋市鶴舞図書館司書の先生にもお世話になりました。

それにしても、『類字名所歌集』に辿りつけたこと、『箏曲大意抄』を手にすることが出来たことは僥倖であつて、これなくしては本稿を完結することに難があつたと思われ
ます。

そしてもう一つ忘れてならないのは、中日新聞毎週火曜日の文化欄『王朝歌人たち―執筆、小林一彦氏』の記事で、私が読み始めたのは本稿の執筆に取り掛かった平成二十八

年四月十二日の第二十九編からであるが、毎週王朝歌人を一人づつとり上げて解説されていて、和歌に無縁の私に王朝和歌の常識をどれ程教えてくれたことか計り知れないものがあり、深く感謝致しております。

〔参考文献・刊行書〕

- 日本歴史地名大系 平凡社
 古代地名大辞典 角川文化振興財団編
 日本国史大辞典 吉川弘文館
 事典日本古代の道と駅 木下 良 昭和五十三年 吉川弘文館
 箏曲大意抄(再刊) 山田松黒 明治三十六年 永東書店
 箏曲地歌の基礎知識 久保田敏子 一九五〇 白水社
 生田・山田箏唄全解 今井道郎 昭和四十九年 武蔵野書院
 箏曲要集(上・下) 山川園松 平成二十四年 勉誠社
 箏曲歌詞解明 松沢冬秀 邦楽社
 生田流箏曲楽譜(玉川) 吉原栄徳
 和歌の歌枕・地名大辞典 鈴木日出男 山口明菜 朝倉書房
 王朝文化事典 片桐洋一 角川書店
 歌枕歌ことば辞典 村田秋男編 昭和五十六年 笠間書院
 類字名所和歌集 増補松葉名所和歌集 神作光一・千艘秋男編 平成四年 笠間書院
 萬葉集 佐竹昭広・他 二〇〇二 岩波書店
 拾遺和歌集 小町谷照彦 一九九〇 岩波書店
 後拾遺和歌集 久保田淳・平田嘉信 一九九四 岩波書店

- 千載和歌集 松野陽一・片野達郎 一九九三 岩波書店
 新古今和歌集 田中裕・赤瀬信吾 一九九二 岩波書店
 風雅和歌集 岩佐美代子 二〇〇四 笠間書院
 安撰和歌集(新編国歌大観第六卷) 二〇一〇 笠間書院
 能因 高重久美 平成十七年 吉川弘文館
 日本三大実録(国史大系第四卷) 雨月物語 中村幸彦・他 昭和五十四年 小学館
 経国集 與謝野寛・他 大正十五年 日本古典全集刊行会
 性靈集 加藤精一 平成二十七年 角川文庫
 紀伊続風土記 第一卷 高野山之部 一九六二 続真言宗全書刊行会
 神明鏡(上・下) 群書類従完成会 昭和五十六年 平文社
 益軒全集 益軒会編 明治四十四年 益軒全集刊行部
 紀伊名所図会 加納諸平 昭和四十五年 歴史図書社
 高野山民俗誌 日野西真定 平成二年 佼成出版社
 日本名所風俗図会 国土地理院図会 平成二十六年 角川書店
 国土地理院地図 高槻市史・高野町史・井手町史・多賀城市(歴史遺産資料) 国土地理院

(みやかわ たけじ)